

蝦夷刀三例 ― 太刀と腰刀 ―

関根 達人・田坂 里穂

はじめに

アイヌにとって「刀」は単なる武器ではなく威信財でもあり、メツカ打ちやニウエンなどの宗教的儀礼にも用いられた。刀や矢筒はイナウトともに家屋の奥壁に吊り下げられた。アイヌの民具に見られる刀は、鈍刀や木刀、真鍮刀といった武器としての機能を持たない刀がほとんどで、時には「ツクナイ（償い）」と呼ばれる賠償品や手印（担保）となった。アイヌ社会で、刀は和人とアイヌあるいはアイヌ同士の関係性を構築・修復する重要な役目を担っていた。

アイヌの人々が用いた太刀や腰刀は「蝦夷刀」と呼ばれ、日本刀とは異なる独自の様式をもつ。そうした蝦夷刀のうち蝦夷太刀は、古代日本の太刀様式を踏襲しており、巖物造太刀など本州から移入したものは「イコロ」（宝物）」と呼ばれ宝物視された。一方、アイヌの人々が和人から入手した刀身にアイヌ文様を彫刻し、樹皮を巻きつけた柄と鞘を装着、金や銀の金具を取り付けて盛大に飾り立てた太刀は「エムシ」と呼ばれた。太刀には腰に吊るすための足金物の代わりに、「エムシアツ」と呼ばれる布製の刀掛け帯が伴う。なお、日本刀に装着されている釦は

蝦夷刀にはほとんどない。

蝦夷刀は古くから和人の注目するところであり、新井白石が享保五年（一七二〇）に編纂した『蝦夷志』には、「正徳二歳壬辰三月下旬写留之」と書かれた太刀イコロとエムシのスケッチや、腰刀イコロのスケッチが掲載されている。蝦夷刀に関して体系的な検討を行ったのはアイヌ工芸に高い関心を示した杉山寿栄男であった。アイヌの工芸品の蒐集家でもあった杉山は、伝世品に基づき蝦夷刀を分類するなかでそれらの特徴を明らかにした（金田一・杉山一九四三）。

一方、筆者らは、北海道内の遺跡の出土品を対象として、蝦夷刀の考古学的検討と材質分析を行ってきた（関根・佐藤二〇一五）。その結果、次のようなことが判明した。

平造・角棟の彎刀である蝦夷刀と、樹皮巻の鞘や元々は別の金具を組み合わせた拵などの特徴とする蝦夷拵は一三世紀に出現するが、一四世紀以前には刀は武器であり、蝦夷拵は装飾性が低く日本刀も多く見られた。一五〜一六世紀には銀製刀装具により蝦夷拵の装飾性が増す一方、儀礼用の切れな刀身が急増する。北海道での刀の出土本数は一四・一五世紀

に最も多く、それ以降減り続ける。とりわけ日本刀は十六世紀以降、出土が激減し、十七世紀以降にはほとんど見られなくなることから、長祿元年（一四五七）のコシヤマインの戦い以後、アイヌが日本刀を入手する機会は極端に減り、寛文九年（一六六九）のシャクシャインの戦いの戦後処理として行われたと推測される武装解除により、武器としての刀をほぼ失ったと考えられる。時代が下るにつれ武器としての機能を失い、宝物化するアイヌの刀は、社会の様々な問題の解決法が、刀を用いた戦から、宝物である刀による賠償・保証へと変わったことを示している。

近年、アイヌ文化に対する関心の高まりを受け、アイヌの民具に関する研究が盛んになってきた。しかしアイヌ社会に伝世した刀剣類に関する研究はアイヌの人々が自ら製作したマキリに偏っており、和人社会との関係性を示す太刀や腰刀についてはほとんど検討されていない。

本稿では、アイヌの刀を考える上で基準となりうる蝦夷太刀と腰刀を紹介する。本論で紹介する刀は関根が写真撮影と実測を行い、それを田坂がトレースした。本文は関根が執筆した。

なお、本稿は、平成二九年度三菱財団研究助成「近世国家北方領域境界域における物資流通に関する考古学的研究」（課題番号…29212、研究代表者…関根達人）ならびに、科学研究費基盤研究B「サハリニアイヌの総合的研究」（課題番号…17H02380、研究代表者…函館工業高等専門学校教授中村和之）の成果の一部を含む。

一 樺太東多来加に伝世した銀蛭卷太刀（図1）

本資料は杉山寿栄男の旧蔵品（以下、杉山コレクションと表記）の一つで、現在は東北歴史博物館が所蔵する（東北歴史博物館二〇〇一）。杉山コレクションには、重要文化財（旧国宝）に指定されている日高沙流に伝世した白覆輪太刀など、優れた蝦夷刀や刀装具類が多くみられる。本資料は『アイヌ芸術 金工・漆器編』にも掲載され、杉山によって「樺太東多来加に襲蔵されて居た、黒漆地に銀線を巻いた蛭卷太刀で、皮革の帯取に七ツ金までそのまま残されたもの。鏝は三枚張り合わせの漆皮製で銀台に覆輪縁である」との解説がなされている。鏝はこの本の扉のカットにも使われており、凶案家でもあった杉山の審美眼にかなった工芸品として高く評価されていたと思われる。

この蝦夷太刀は銀蛭卷の拵に刀身が収められている。柄頭から鐺までは全長八九・三センチメートル、刀身は長さ五〇・四センチメートル、刃長三七・六センチメートル、反り〇・八センチメートルである。

柄と鞘は木胎に黒漆を塗り、幅七ミリメートル前後の銀の薄板を螺旋状に巻き、銀製の金具が付く。柄には覆輪がかけられ、端を兜金と縁で固定している。目釘穴は四箇所あり、うち一つに目釘が残るが、目貫は見当たらない。柄には三つ巴文が施された猿手と、四点の俵鉾が遺存している。鞘には鞘口と花菱文のある鐺に加え、猪の目透かしのある鍍金された足金物二点（一の足と二の足）、責金二点が残っている。なお、前述の通り、杉山が入手した段階では「皮革の帯取に七ツ金までそのまま残され」ていたようだが、現在それらは見当たらない。

鏝は長さ・幅とも八・八センチメートルの木瓜形で、獣皮に黒漆を塗り、縁に銀覆輪を被せている。茎穴は長さ二・六センチメートルである。



鍔



大切羽



柄頭



俵鍔



縁・鞘口



足金物 (一の足)



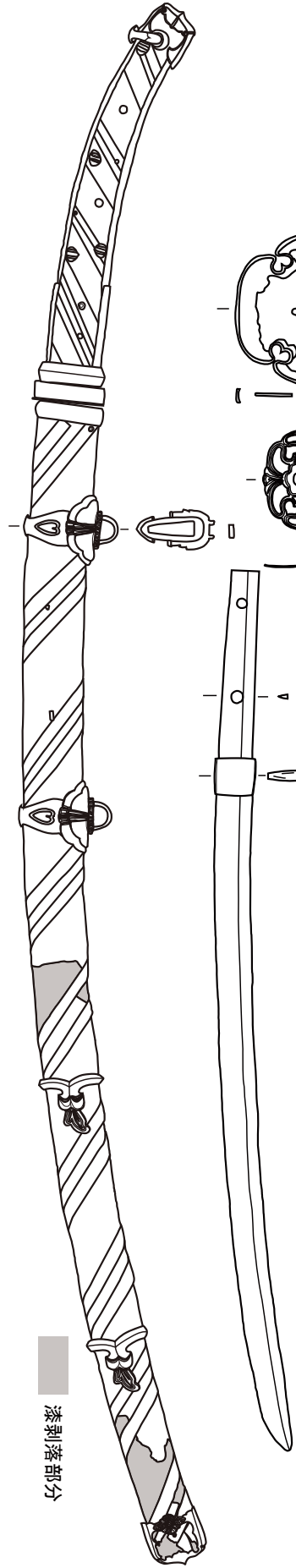
足金物 (二の足)



黄金具



鑑



漆剥落部分



(実測図)

図 1 權太東多来加に伝世した銀蛭巻太刀

銀製の大切羽は八ツ木瓜形で、四か所に猪の目透かしがある。

刀身は平棟で銀製の鍔を伴う。茎の先端は切断されており、二か所に目釘穴が認められる。拵に対して刀身が不釣り合いなまでに短い点に拵重視の蝦夷刀の特質が現れている。

刀身は別として、刀装具は材質や造りに共通性が認められることから、製作当初の一体性を保っている可能性が高いと判断される。本太刀拵は、蛭巻や鍔の特徴が、重要文化財に指定されている黒漆銀銅蛭巻太刀（東京国立博物館蔵）に類似する。これは南部政長（一三六〇）佩用と伝えられ、一四世紀の年代が与えられている（東京国立博物館一九九七）。前述の通り、コシヤマインの戦い以降、アイヌ社会では日本刀は極端に少なくなるが、東多来加に伝来した銀蛭巻太刀拵には鍔が装着された日本刀が伴っている。東多来加に伝来した銀蛭巻太刀は、重文の黒漆銀銅蛭巻太刀と同じ一四世紀代のものと考えたい。

本資料が収集された樺太東多来加（現ロシア連邦サハリン州ポロナイスキー区プロムイスロヴォーエ村）は旧敷香（ポロナイスク）の東方約二六キロメートル、テルベニア湾とネフスコエ湖に挟まれた、タランコタン川河口東岸の砂州上に立地する。多来加は樺太アイヌの集落として知られ、安政三・四年（一八五六・五七）に現地を訪れた目賀田帯刀の『北延叙歴検真図』・『北海道歴検図』では「夷家」として五棟のチセと高床式の倉庫などが描かれている（関根二〇一一）。この地の樺太アイヌは明治三八年（一九〇五）の流行性感冒により多くの死亡者がでたという（長谷部一九九二）。旧樺太時代、東多来加は最北のアイヌ集落であり、昭和五年（一九三〇）の国勢調査によれば、七戸二〇人の樺太ア

イヌが居住していた。

東多来加周辺では二〇〇基近いアイヌ文化期の方形竪穴の窪みが確認され、鉄鍋や内耳土器が採集されている（新潟・宇田川一九九〇）。昭和一二年（一九三七）・一三年に第一・二回日本民族学会北方文化調査団の一員として樺太の遺跡を調査した馬場脩が東多来加貝塚（プロムイスロヴォーエII遺跡）で発掘した資料（市立函館博物館所蔵馬場コレクション）には、アイヌ文化期の骨角製品が多数含まれる。また東多来加では、昭和八年、伊東信雄によりこの地の樺太アイヌの家に伝世していた二領の革札胴丸式掛甲が発見されている（末永・伊東一九七九）。

二 せたな町川尻川濯神社裏出土金銅装牡丹唐草文腰刀（図2）

本資料は、北海道久遠郡せたな町川尻の瀬田内チャシ跡の麓にかつて位置していた川濯神社裏から出土したもので、隣接する旧大成町太櫓駐在所勤務時に周辺の遺跡を踏査していた熊野喜蔵氏から昭和五年に五稜郭タワー株式会社が譲渡を受けた。その際、日本刀研究で著名な佐藤貫一（寒山）氏を介して修復が依頼され、黒漆鮫皮包の鞘と柄が復元された。瀬田内チャシ跡を発見した千代肇氏の調査資料の中に本資料のネガがあり、『北檜山町史』で初めて写真が掲載された（北檜山町一九八一）。金銅魚子地牡丹造の柄頭・目貫・縁・鞘口・栗形・鐙と小柄、銀魚子地に三ツ巴文を散らした鞘板が遺存する。刀身や筭はない。金銅製の刀装具は材質や造りに共通性が認められることから、製作当初の一体性を保っている可能性が高いと判断される。

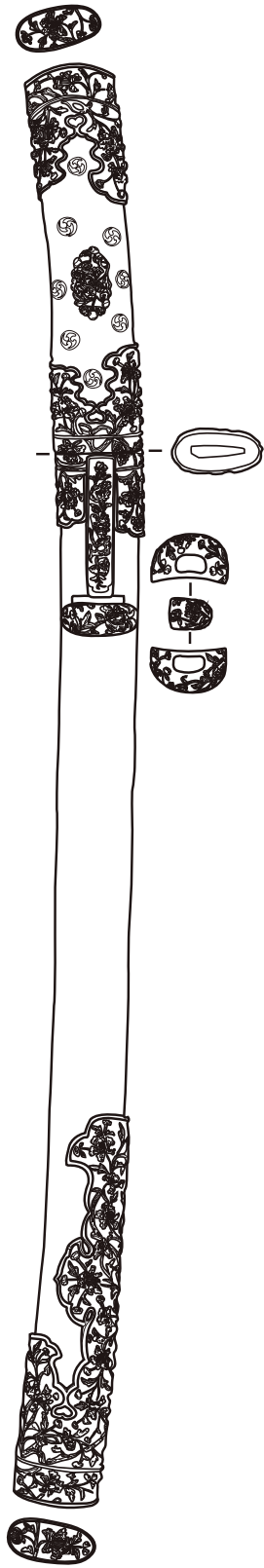


図 2 せたな町川尻川濯神社裏出土金銅装牡丹唐草文腰刀

金銅装牡丹唐草文腰刀は比較的類例が多く、アイヌの人々の嗜好に叶った拵であった。本例に最も類似する資料としては、東京国立博物館に所蔵される蝦夷拵牡丹文（列品番号F17289・東京国立博物館一七七九の174）や、北海道沙流郡平取コタンの首長平村ペンリウク（一八三三～一九〇三）から杉山寿栄男が入手した腰刀（東北歴史博物館二〇〇一の腰刀1）が挙げられる。本資料は比較的丁寧な魚子を打ち、牡丹文が高彫であることから、一四世紀頃の作と推定される。

後志利別川の河口に位置するセタナイは、一五世紀に衰退したヨイチに替わる道内屈指の交易拠点であり、一六・一七世紀には渡島半島最大級のアイヌ集落であったと考えられる（関根二〇一六）。一六世紀前半に松前大館や上之国勝山館を相次いで攻撃したタナサカシヤタリコナ、寛永二〇年（一六四三）、松前藩成立後初めての大規模蜂起の中心となったヘナウケは、いずれもセタナイ付近を本拠としていた。

本資料の出土地点に近い瀬田内チャシ跡では発掘調査によって、一六～一八世紀代の陶磁器をはじめ、鉄鍋、キセル、マキリ、鉄鎌、鉄製釣針・マレク（鉤鉛）・鉄製ヤス・骨角製キテ（鉛頭）・中柄などの遺物が多量に出土している（瀬棚町教育委員会一九七九、北檜山町教育委員会一九八〇）。瀬田内チャシ跡で発見された豊富な鉄製漁撈具やアワビの貝塚は、セタナイが和人向けの海産物の移出場であったことを示している。本資料は刀装具が一式まとまって出土していることからアイヌ墓の副葬品の可能性が高く、作行の良さからみて首長層の所持品であったと思われる。

三 新潟市指定文化財銀装桐文腰刀（図3）

この腰刀は越後黒鳥（新潟市西区）の阿部家旧蔵品で、江戸後期の阿部家の当主良伯の実弟が松前藩医を務めた際に下賜されたものと伝えられ、松前藩主の旧蔵品として阿部家に伝わった薬箱とともに市の文化財に指定されている（新潟市二〇〇二）。松前藩医を務めたとされる人物を特定することはできなかったが、文化七年（一八一〇）六月九日、移封先の梁川で藩主章広にお目見した人物のひとりとして「和田家諸用記録」（『松前町史資料編二』所収）に名前が挙げられている町医の阿部英篤を候補として考えておきたい。

この腰刀は全長四六・九センチメートル、最大幅四・一センチメートルの拵のみで刀身はない。柄・鞘口・栗形・鐙は銀板に桐の葉を唐草風に打ち出した蝦夷拵風の腰刀で、元々鞘は黒漆塗に金蒔絵が施されていたが、漆がはげたため現在は朱色に塗りなおされている。柄には鳳凰を打ち出し鍍金を施した金具が付く。刀装具は材質や造りに共通性が認められることから、製作当初の一体性を保っている可能性が高いと判断される。使われているモチーフは異なるが、『アイヌ芸術 金工・漆器編』図版七―四の腰刀と文様の表現手法が似ている。この腰刀について杉山寿栄男は「幅広形式で虎杖草を唐草風に打ち出した比較的新しい凡てアイヌ向け交易品」との解説を行っている。

アイヌ民族に伝世した腰刀のなかに鞘に蒔絵を施したものは、管見の限り確認できない。本資料は蝦夷拵に対する和人の求めに応じて、アイ

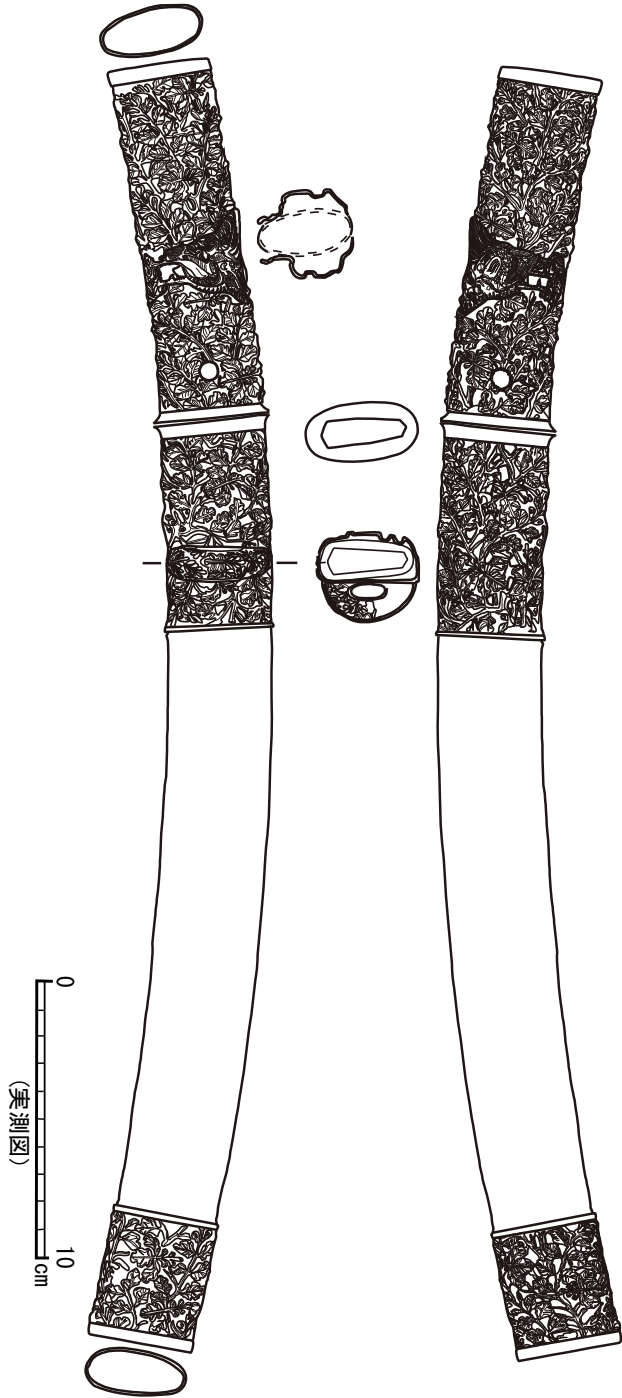


图 3 新潟市指定文化財銀装桐文腰刀

又好みの腰刀に日本刀の拵えの要素を取り入れ江戸後期に製作されたものではなからうか。本資料の由来にあるように、越後へ帰る医師に対して松前藩主から下賜された蝦夷土産としてふさわしいものといえよう。

まとめ

本稿で紹介した樺太東多来加に伝世した銀蛭巻太刀と、せたな町川尻川濯神社裏出土の金銅装牡丹唐草文腰刀はともに、一四世紀頃の優れた拵がアイヌ社会に受容されていたことを示している。

東多来加の樺太アイヌは銀蛭巻太刀だけでなく革札胴丸式挂甲も所持していた。彼らがこれらの古式ゆかしい日本製の武器や武具をいつの段階で入手したか今後明らかにする必要がある。

瀬田内チャシ跡から出土する遺物や『新羅之記録』が示す通り、セタナイがヨイチに替わって道内有数の対和人交易場となるのは一六世紀である。せたな町川尻川濯神社裏から出土した金銅装牡丹唐草文腰刀は一四世紀頃に製作されたものと考えられるが、これがセタナイの有力なアイヌの墓に納められたのは、セタナイが交易場として栄えた時期、すなわち一六世紀から、城下交易体制から商場知行制に基づく交易体制への移行に伴いセタナイが衰退する一七世紀後半頃までであろう。

越後に伝世した銀装桐文腰刀は、江戸後期、北方への関心が高まるなかで、蝦夷錦・青玉・厚司やアイヌ絵とともに、蝦夷刀もまた和人向けの蝦夷土産の一つであったことを物語っている。本来アイヌの人々が自らの嗜好に合わせて和産物から選んでいたものが、やがて和人の手により

アイヌの人々の嗜好に合わせて作られるようになり、さらにそれが異文化に対する関心から和人社会に「逆輸入」する有様は、和人とアイヌの歴史的關係を考える上で、興味深い現象といえるのではなからうか。

【謝辞】本稿を執筆するにあたり、資料調査で東北歴史博物館、五稜郭タワー株式会社、新潟市教育委員会にお世話になった。また藤沼邦彦氏と佐藤雄生氏からは資料に関してご教示を得た。末筆ではありますが、感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 北檜山町 一九八一 『北檜山町史』
- 北檜山町教育委員会 一九八〇 『瀬田内チャシ跡遺跡発掘調査報告書』
- 金田一京助・杉山寿栄男 一九四三 『アイヌ芸術 金工・漆器編』
- 第一青年社
- 佐藤雄生ほか 二〇一八 『和入地とその周辺のアイン文化に関する基礎的研究』（平成二九年度公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構アイヌ関連研究事業研究助成（一般研究）成果報告書）
- 末永雅雄・伊東信雄 一九七九 『挂甲の系譜』 雄山閣
- 関根達人 二〇〇三 『アイヌ墓の副葬品』 『物質文化』 七六 三八〜五
- 四頁 物質文化研究会
- 関根達人 二〇一二 『場所図・古絵図にみる1850年代の樺太（サハリン）島における先住民族と国家―目賀田帯刀筆『北海道歴検図』の検討を中心に―』 『北海道・東北史研究』 八 二四〜五六頁 北海

道出版企画センター

関根達人 二〇一六 『モノから見たアイヌ文化史』 吉川弘文館

関根達人・佐藤里穂 二〇一五 「蝦夷刀の成立と変遷」『日本考古学』

三九 九一〜一一一頁 日本考古学協会

瀬棚町教育委員会 一九七九 『瀬田内チャシ』

東京国立博物館 一九九七 『東京国立博物館図版目録 刀装篇』 大塚

巧藝社

東北歴史博物館 二〇〇一 『杉山コレクション アイヌ関係資料図録』

新潟武彦・宇田川洋 一九九〇 『サハリン南部の遺跡』 北海道出版企

画センター

新潟市 二〇〇二 『新潟市の文化財』 新潟歴史双書六

長谷部一弘 一九九二 「馬場コレクション研究」『市立函館博物館研究

紀要』二 一〜二四頁

藤沼邦彦・小山有希 一九九七 「原始工芸・アイヌ工芸の研究者とし

ての杉山寿栄男」『研究紀要』二二三 一〜二九頁 東北歴史資料館

(せきね・たつひと 弘前大学人文社会科学部教授)

(たさか・りほ 黒石市教育委員会)